

Special Essay

祝、山中伸弥教授、ノーベル医学生理学賞受賞

地域医療連携講座 足達 寿

日本における最近の明るいニュースと言えば、やはり京都大学 iPS 細胞研究所長、山中伸弥教授のノーベル医学生理学賞の受賞であろう。受賞理由は、成熟した細胞から未熟な多能性幹細胞への先祖返りが可能であることを発見。「細胞や器官の発生の理解に革命を起こした」と評価された。日本人の医学生理学賞受賞は、1987年の利根川 進博士以来、実に25年ぶり2人目であり、まだ、50歳という若さで現役バリバリの研究者の受賞に日本中が沸いた。山中教授にとっては、2006年のiPS細胞作製からわずか6年というスピード受賞となったが、素晴らしい研究成果とは対照的に、記者会見でのユーモラスな受賞の感想や研修医時代の友人たちの話が面白かった。山中教授は、「スウェーデンからの受賞の知らせは、家の洗濯機がガタガタと音がするので詳しく調べていた時に受けた」と切り出し、研修医時代の友人たちは整形外科医としてスタートしたが、手術が下手で、とても臨床医としてはやっていけないと思ったなど手厳しい感想を述べていた。また、山中教授自身も手術の時は、「じゃま中」と揶揄され、文字通り「じゃま者扱い」をされていたので、臨床ではとてもやってはいけないと思い、研究者に転身することを決めたと述べておられた。ノーベル医学生理学賞を受賞するようなスーパーヒーローが、このような挫折を経験されていたということを知ると、何となく、ほっとする気持ちがするのは私だけであろうか？

山中教授のお話しの中でもう一つ印象深かったことは、国、同僚研究者、友人、家族に対する感謝の言葉であった。「国の支援のたまものであり、日本が受賞したと思っている。支援がなければ受賞はなかった」と強調され、特に同僚研究者3名の名前を挙げて感謝されていた。恐らく、普段から控えめで礼儀正しく、チームワークを大切にされる方なのだろうが、こ

のような記者会見の場で、これほど謙虚に「感謝の意」を表される方も少ないであろう。その卓越した人間性にも敬意を表したい。

若い研究者や学生へ向けては、「研究はアイデアと努力次第でいろいろなものを生み出すことができる。日本は天然資源が限られているが、研究成果や知的財産は無限である。研究は国の力になり、病気に苦しむ人たちの役に立つ」とエールを送られた。今後、iPS細胞の本格的な実用化には、まだ時間を要すると思われるが、新薬の開発や臨床応用が一日でも早く実現することを願ってやまない。

